

地名が変わる日

豊田 由貴夫

一 昨年の二〇〇五年八月、インドネシアで行われた農業関係のシンポジウムに出席する機会があった。開催地は、ジャヤプラという、インドネシアではもともと東端にあたる都市であり、ニューギニア島の中央部、パプアニューギニアとの国境近くだった。私はこれまでパプアニューギニアを研究してきたのだが、このニューギニア島の西部、現在のインドネシア領パプア州は是非とも訪れてみたい地域だった。以前、西イリアンあるいはイリアンジャヤと呼ばれていたこの地域は、ダニ民族などの人類学の古典的な調査が行われたことで有名であり、また現在ではインドネシア政府から人類学の調査許可が絶対に出ないという「神話」でも有名だった。そこで国際シンポジウムが開かれると聞き、しかも発表のために旅費の補助が出そうだということを知りつけて、大急ぎで発表の準備をして、何とか参加にこぎつけたのだった。

シンポジウムでは熱帯地域での農業開発の可能性というテーマが中心であり、発表者は東南アジア諸国からの参加者が大部分で、これに加えて日本とオランダの研究者が参加していた。開催地ということもあり、インドネシア人の発表が多かったのだが、自国の農業開発の可能性に関して、多くの発表者が

地名が変わる日（豊田）

楽観的だったのが気になった。

しかしこのシンポジウムではもう一つ気になることがあった。インドネシア人の発表者が、ニューギニア島のことをパプア島と表現していたのだった。最初は本人の言い間違いか、私の聞き間違いかと思っただが、もう一人が同じ表現をしていたので、どうも間違いではなさそうだった。

ニューギニア島は、グリーンランドに次いで世界第二の大きさの島とされ、西半分がインドネシア領、東半分と周辺の島々はパプアニューギニアという独立国となっている。この島の西半分のインドネシア領は、かつては西イリアン州と呼ばれていたが、最近になってパプア州と改名された。したがって、確かに州の名前はパプアなのだが、それはあくまでも州の名称であり、島の名称はずっと国際的にもニューギニア島のはずである。自分たちの住んでいる島なので、州名と島名を混同するということは考えにくく、そこには、「今まではニューギニア島と呼ばれていたが、これからはパプア島と呼びたい」という意図を感じざるを得なかった。隣国のパプアニューギニアにとって、これまで国際的に慣例として使われてきたニューギニア島の名称を使わないのは、自国名の中に使われている「ニューギニア」という名称を使わないことでもあり、気分のよいものではないだろう。長年パプアニューギニアで調査を行ってきたこの国に親近感を持っている私も、多少の違和感を覚えた。

日本に帰国してから、他にもそのような例があるのかと、インターネットで検索をかけると、確かにニューギニア島をパプア島と呼んでいるニュースが何件か出てきた。いずれもインドネシア側から発表されたニュースであり、ここ一、二年のものである。ニュースの本文ではそのような表現はされていな

いが、見出しでパプア島と使っている微妙な例もあった。

同一の場所が国によって異なる名称で表現されるのは決して少なくない。朝鮮半島が韓国で韓半島と呼ばれているのは有名だし、日本海を韓国は東海と呼ぶべきだと主張している。日本の竹島を韓国・北朝鮮が独島と呼ぶのと同様、異なる名称を主張する背景には、何らかの政治的主張、あるいは領土に対する主張があると考えられる。そう考えると、ニューギニア島をパプア島と呼ぶのには、領土への主張があるのかと勘ぐりたくなる。なるほど人口二億のインドネシアにとって、人口五百万のパプアニューギニアは取るに足らない小国であり、機会があれば自国の領土としてしまおう、というぐらいの考えをインドネシアが持つていても不思議ではない。これまでも、インドネシアの軍隊が国境を越えてパプアニューギニアに侵入しているというニュースが時々流れてきていた。

数年前に、毎年発行される現代用語の辞典に、世界の紛争の特集が生まれ、その一部として世界の将来の国境地図という「予想」が行われていた。そこに現在のパプアニューギニアがインドネシア領として塗りつぶされていたのを見て、少なからぬ衝撃を受けた記憶がある。実際にそのような事態が起こるかどうかは別問題だが、そうなった時は、ニューギニア島がパプア島と呼ばれることになるのかもしれない。

パプアニューギニアとインドネシアとの国境は東経一四一度線の直線であるが、この国境は地図上でヨーロッパ列強が植民地として分割した境界に由来しており、それ以上の地理的意味はない。一八二八

地名が変わる日（豊田）

年にオランダがニューギニア島の西半分の領有を宣言し、その後、太平洋に遅れてやってきたドイツがイギリスと協定を結び、一八八四年、ニューギニア島東部の北側がドイツ領、南側がイギリス領となった。その後、島の西半分はインドネシア領となり、東半分は様々な経緯を経て一九七五年にパプアニューギニア国として独立した。この結果、東経一四一度線がパプアニューギニアとインドネシアとの国境となったのである。

実はもう十数年前になるのだが、私はインドネシアとの国境を見ようと思い、パプアニューギニアの西端の町であるヴァニモから、車で海岸の道路を走ったことがある。私が抱いていた予想は、海岸の道路をずつと行けば、やがて道が遮断され、そこには軍隊のメンバーが銃を持ちながら警備をしていて、「ここは国境でここから先はインドネシア領であり、通行はできない」と言われるという状況であった。別にインドネシア領へ入りたいわけではなく、単に国境を見てみたいだけだったので、そのような状況を確認できればよい、と思っていた。

しかし、海岸の道路をずつと運転していくと、車の通る道は海岸の砂浜に出てしまい、それ以上は車で進めなくなった。近くに数件の民家があったので、私はそこで一人の少年をつかまえて、国境はどこだと訊くと、その砂浜の先にあるという。車を置いて少年と二人で砂浜を歩いていくと、そこにはコンクリート製の高さ一メートルちよつとの「標識」が立っており、ここが国境なのだという。確かに、そのコンクリート製の標識には金属板が貼られていて、インドネシアとパプアニューギニアの国境だと示されている。しかしそこには特に柵やフェンスがあるわけではなく、二つの国の間は自由に行き来でき

るのである。もっとも当然のことだが、国境を越えたからといって何が変わるわけでもなく、砂浜が続いているだけである。標識の金属板の文字は無事に読めるのだが、その周囲の白いコンクリート部分は落書きでいっぱいであり、これが国境かと思うと情けなくなるほどである。

後で知ったのだが、一八八四年に定められたこの境界線について、実際に現地で調査が行われたのはそれから八〇年あまりも経た一九六六年のことである。この年、インドネシアとオーストラリアの共同チームが国境地域の調査を行い、両国間の国境を「正確に」引くことになる。しかしこの際の国境も、国境を「線」として引くのではなく、十四カ所にコンクリート製の境界標を建設し、国境はその「点」を結ぶものとして示されただけであった。おまけにその国境付近にはフライ川という川が通っていることから、国境の一部が川筋に沿ったものとなっており、この川がまた雨期で水量が増えると流域を変えたりするものだから、国境線はますます微妙なものとなる。

実際、国境付近は人口が希薄な地域であり、熱帯雨林のため道路の建設はきわめて困難であり、国境を柵のように何らかの「境界線」として示すのは事実上不可能である。国境を越えるのは容易であり、むしろどこが実際の国境なのかもわからないのが実状であり、越境という行為を確認することさえも難しい。国境は「地図の上」では簡単に示せるが、実際の「地面の上」に示すのはほとんど不可能なのである。

そして人工的に「地図の上」で引かれたこの「国境」は周辺の住民には意識されることなく、人々はこの境界線を越えて様々な活動を行ってきた。国境周辺地域では焼畑耕作が一般的に行われ、集落自体

地名が変わる日(豊田)

も数年で移動する場合がある。しかも、これ以外に婚姻による人の移動も広い範囲で行われていた。このように、その後「国境」となるべき境界線を、あるいは「国境」となった後の境界線を、人々は頻りに、しかも集団で移動し続けてきたのである。

現在のバプアニューギニア・インドネシア間の国境協定もこのような状況を考慮しており、国境付近の住民が「伝統的・慣習的目的のために越境すること」を認めている。一九七三年にインドネシアと当時のバプア・ニューギニア地域(まだバプアニューギニアとしては独立をしていない)の施政権国であったオーストラリアが締結した国境協定によれば、第三条が「伝統的・慣習的目的のための越境」という項目になっており、ここでは「社会的交際、婚姻を含む儀式、採集、狩猟、漁撈、その他の水の利用、伝統的な交易」などのための越境行為についてはこれを認め、かつ今後も尊重するとしている。さらに、第四条では「陸上・海上における越境権」として、国境付近の住民が漁をすることやその他の水を利用することなどの伝統的な権利は、国境を越えて行使されることを同様に認めている。

この境界線が決められた後、ニューギニア島の西側はオランダ領からインドネシア領となるのだが、しかし、この経緯は簡単なものではなかった。オランダ統治時代から独立運動が展開され、一九六九年に「西イリアン州」としてインドネシアの第十七番目の州となった後も、引き続き独立運動が続けられた。これには、この地域が文化的にはインドネシアの他の州よりもバプアニューギニア側に近いことも関係している。この地域の住民は「メラネシア系」とされていて、住民の風貌もアジア系の人たちとは異なっている。この地域の独立運動に対してインドネシア政府は軍隊を派遣して鎮圧しようとしたため、

住民の独立運動は武力闘争の性格を帯びるようになった。そして一九八〇年代には、インドネシア軍に追われた住民が「難民」としてパプアニューギニアに逃亡してくるという状況が出現した。その逃亡した難民を追ってインドネシア軍がパプアニューギニアに何度か侵入してきたのも、この頃であった。その後インドネシア政府が州名をパプア州と変更したのも、住民の独立運動を鎮めようとする意図があったのである。

パプア州のジャヤプラを初めて訪れる時、私はパプアニューギニアの地方にあるような小さな町を想像していた。国境を挟んでパプアニューギニア側にある町はせいぜい人口が数万である。国境があるとはいえ数十キロしか離れていないし、十数年前に見た、誰でも行き来のできる国境の印象から、国境の両側でそれほど大きな差があるとは思えなかった。しかし私がジャヤプラで見たのは、活気あふれる大都市であった。町の中心の通りには至る所に屋台が並んでおり、週末の夜にはバスや車、バイクに乗って周辺地域から多くの人々が集まり、通りは人があふれて歩けなくなるほどであった。「インドネシア系」の人たちが多いのだが、その人たちに混じって「パプア系」の人々も様々な屋台を出店している。かつてここで独立運動が行われていたとはまったく想像できなかった。インドネシア政府は、他の州から百万を超える人々をこの地域に送り込んで移住させたというが、インドネシアの国力の大きさに、私は改めて圧倒されてしまった。

もちろん、インドネシアがニューギニア島をパプア島と呼ぶ背景に、インドネシアの領土への主張を

地名が変わる日（豊田）

見ようとする私の考えは、単なる思い過ごしなのかもしれない。便宜上、州名を転用して島名とする場合があるだけなのかもしれない。しかし、パプア州での数日の滞在で私はパプアニューギニアとインドネシアの国力の差を思い知らされ、ニューギニア島がパプア島と名前が変わる日の現実性を感じてしまったのである。

（本学文学研究科教授）